

協同労働のこれからと仲間への期待

ワーカーズコープ・センター事業団

理事長 田中 羊子

① 現代という人類史的歴史の転換点をどう生きるのか

●「資本主義の終わりか、人間の終焉か？ 未来への大分岐」(斎藤幸平) より

- ・政治や経済の悪化と社会の閉塞感—その根本原因は資本主義そのものにある。
新自由主義とは、資本蓄積の危機を先延ばしにするために、資本の側がとった方策。
危機の先伸ばしは格差を拡大し、地球環境を破壊し、危機をいっそう深刻なものへ。
- ・もはや資本主義の「飼いならし」は不可能。民主主義的で平等な社会的共同性の構築を、国家でも市場でもないところでもう一度ラディカルに構想する必要がある。創造力と想像力を駆使して、私たちはどうやってこの資本主義の矛盾を乗り越えるかを真剣に考え実践する必要がある。
- ・冷戦の病魔にとりつかれていない若い世代にこそ、自由、平等、そして連帯という言葉を一続きに考え、新たな息を吹き込むことができるかもしれない。資本主義がつぶす人々の自由と能力—人々が要求し始めているのは、自分たちの才能や能力を発揮するための手段を、より民主主義的、かつ自律的な方法で管理すること。それは国家による介入や保護ではない。自分たちの手でそうした生産手段を管理するということは、資本主義の根本原理とは相容れない。
そこに、資本主義を超える社会を、まったく新しい形でつくり出そうとする人々の欲求がある。

●現代社会の不幸せの原因と解決策—問題の核心は「関係性」にある (スティーヴ・バルトリニ)

経済成長がもはや幸福を生まない時代

社会関係の質に影響を与える重要な要素は「消費主義文化」

生活における「外発的」動機づけ（損得や利害）を重視…他者との関係、自己との関係の悪化

- ・関係性の豊かな社会の構築を可能にする経済的・社会的改革が不可欠

特に学校を変革すること、「働き方」を変えること

内発的動機付けにもとづく労働が意味を持ち、人間関係や社会的つながりを構築する手段へ

●地球の「有限性」を前提とし、「人間の幸福とは何か」というシンプルな問いに改めて取り組

み、地域と人類社会を持続可能な形で発展させる道を求めていかななくてはならない (見田宗介)

- ・価値基準の展開の基調は、幸福感受性の奪還。依拠されるべき確信は「人に喜ばれることが人の喜びである」という人間の欲望の構造。社会的生きがいとしての仕事、共存の環としての仕事。
- ・資本主義の壁は、外から破壊するのではなく、自由と魅力性の力によって内側から破られなければならない。その問いに取りくむ3つの価値基準～①肯定的であること ②多様であること ③現在を楽しむ（心が躍るもの、充実した悔いのないもの）
- ・今、ここに1つの花が咲くとき、すでに世界は新しい。

●労働者協同組合の法制化の本質的な意義

「資本主義の分断社会の根源は、1人ひとりが相容れない価値観を強いられ、内包しなければならないこと。分裂をこえて1人の組合員（労働者）として、1人の市民として、1人の人間として統合されることによって、人ははかり知れない力を発揮する存在だ」

② 法制化を目前に一私たちが到達した地平

●40 年間、問い続けてきたテーマ

働く者、市民がどうしたら社会をつくる主人公になれるのか

●地域の人々と共に持続可能な社会づくりを

ー協同労働はなぜ地域の人々の願いを形にできるのか

第1期 委託事業を拡大する中での就労創出～全組合員経営の確立へ（1987 年～）

第2期 新しい福祉社会の創造～高齢協と地域福祉事業所の設立運動（1995 年～）

第3期 市民主体の新しい公共の創造、社会連帯委員会の設立へ（2003 年～）

第4期 市民主体の持続可能な地域づくりへ（2011 年～）

（1）東北被災地での格闘からつかんだ確信

○2011 年 7 月東北復興本部を発足。「東北に新しい日本を」

経済成長最優先の社会と決別して命と自然、人のつながりが本当に大切にされる社会を
F E C 自給圏の創造をテーマに掲げて

○地域の底から社会をつくる～実践の中からつかんだこと

①被災地の人々が困難の中から立ち上がる上で、協同労働が本当に力になるという確信
～協同労働を通じた仲間の主体性、市民性の高まり

②住民主体の地域づくりに協同労働を生かすことが可能だという確信

- ・協同労働を住民に手渡す中で、地域が動き出す…住民立のワーカーズコープづくりへ。
- ・自然や風土、住民の気風や生業の技、食の文化、そのすべてが豊かなケア力となり、若者たちの生きる力の回復を支える力になることを発見！

（2）生活困窮問題を焦点にすえた取り組みの中で

①「弱者支援」→「当事者主体」をケア観の中心に据える中で

社会的な孤立をなくし「誰もが居場所と役割を持てる地域づくり」が、全分野をつなぐよい仕事の共通のテーマに

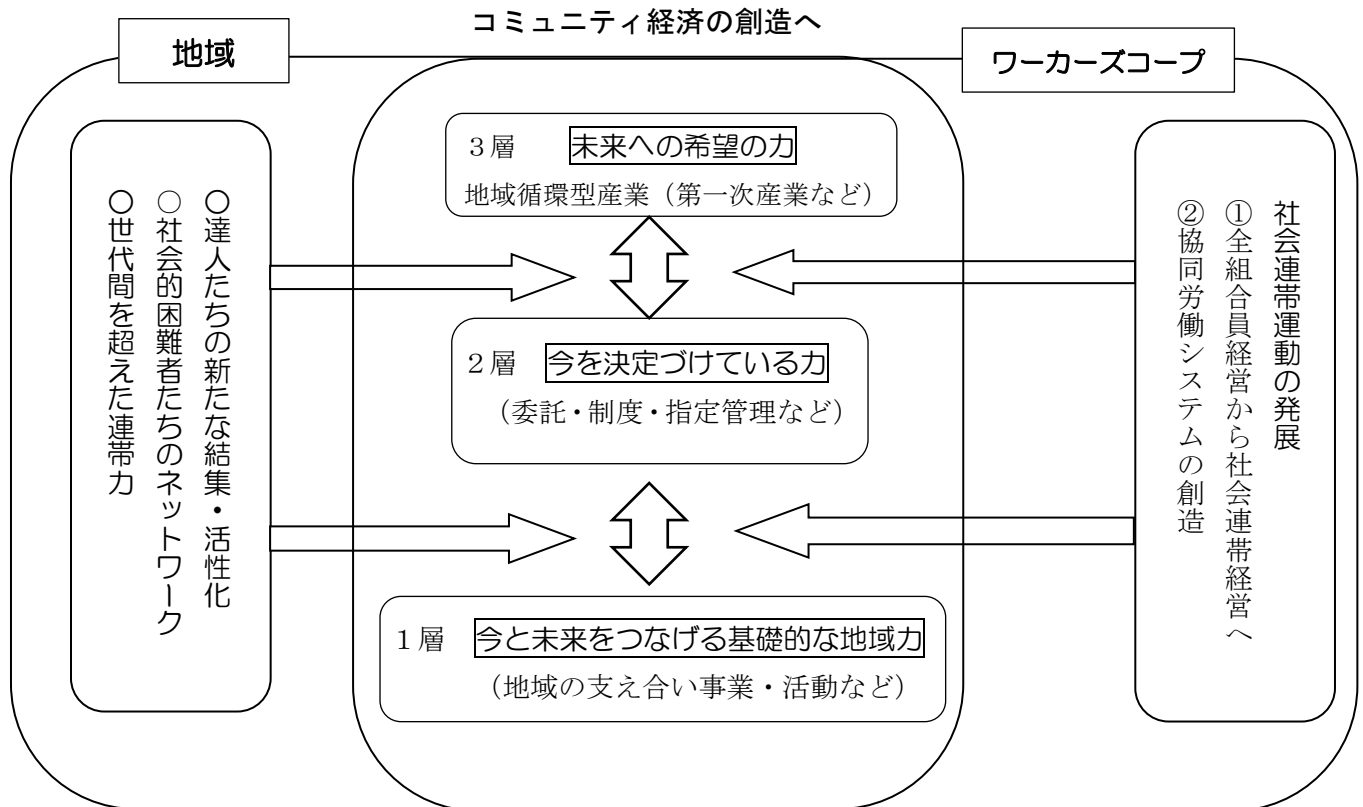
②社会的困難にある仲間と共に働く中での協同労働の深まり

1 人 1 人の存在を認め合い、違いや弱さを受けとめ合い、いいところを生かし合う関係づくり

③地域食堂やフードバンクなど、社会連帯活動を地域住民と共に…市民の力との合流

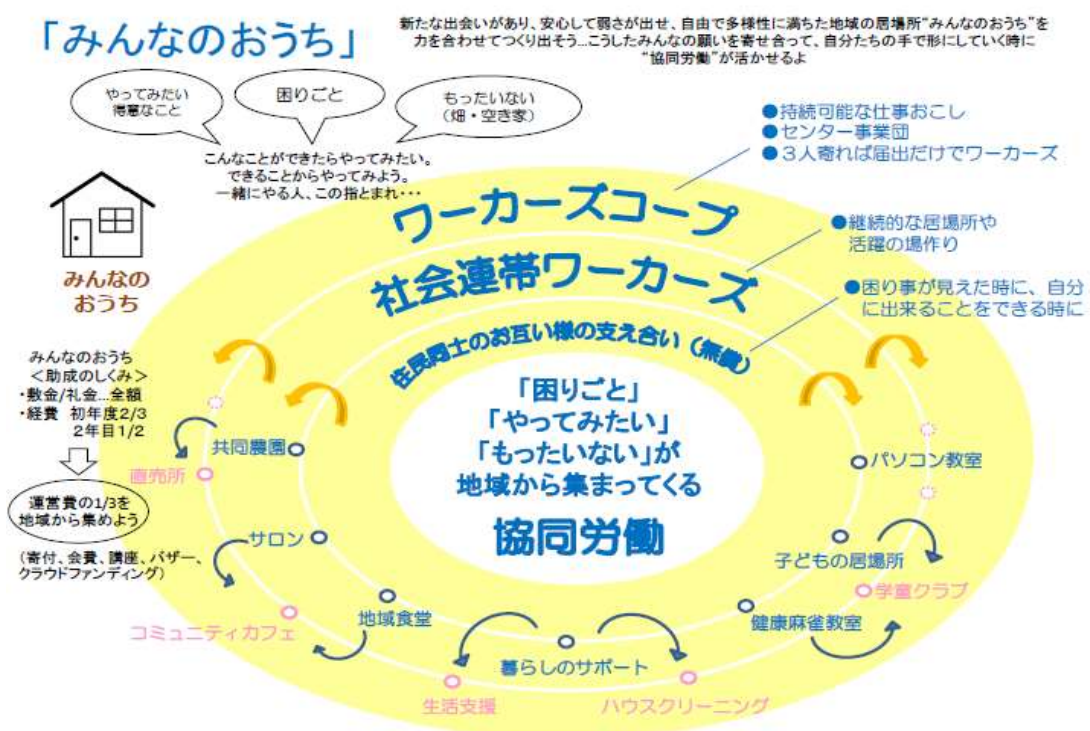
（3）「3 層構造」の発見…F E C 自給圏、コミュニティ経済の創造へ

- ・「ケア（2 層）」を全ての土台にすえて、誰もが力を発揮できる居場所と働く場をつくり出す
- ・その活躍の舞台は「自然（3 層）」と「コミュニティ（1 層）」の中に豊かに広がっている
- ・命を支えるために必要な自然環境のケア、食とエネルギーを自分たちの手でつくり出す
- ・地域に暮らす住民自身が生きること、暮らすこと、働くことを自分たちの手で意思決定できる社会づくりへ



（４）地域の中に社会をつくる～みんなのうちに・協同総合福祉拠点づくりへ

- ・現代社会の最大の危機は、人間性を育む社会の崩壊、共同体の喪失
- ・人と人、人と自然の豊かな結びつきを感じられる社会を足元の地域から
- ・「困りごと」「やってみたい」「もったいない」を持ち寄って、みんなの願いを実現する地域のよりどころへ



●こうしたプロセスを通じた仲間たちの「協同労働」の深まりこそが核心点

○「問いかけ」ること

資本主義のもとでは当たり前のもので、私たちの中に浸透している競争や能力主義、差別や排除の価値観と向き合う中で… “それでいいのか”



○「信頼」すること

- ・ 1人一人の存在を認め合うこと
- ・ 違いや弱さを受けとめ合うこと
- ・ 得意な力やいいところを生かし合うこと
- ・ 仲間を「信じる」こと

そのために「話し合う」こと

人は変われる。人は孤立すると力を出せない

人は人を信じられる環境にあれば、

どんな人もあらゆる力を発揮できる存在、人々には無限の力がある

社会を変えていく無限の力は、人間への信頼の力から生まれる

この人間に対する信頼の力をどうしたら持てるのか



- ・ 組合員の協同を大事にする働き方が、コミュニティの中で人間の関係性や社会的つながり、自然との関係を再構築していく上で、大切な役割を担い始めている。
- ・ 1人ひとりの人間の覚醒と成長・発達が、協同・連帯を旨とする新しい社会を創造する力へ

○「労働者協同組合」から「協同労働の協同組合」への発展

仲間の協同労働によるよい仕事の高まりが、利用者や住民をも主体にし、地域から新しい社会をつくり出す活力を生み始めている ⇨ 労働者協同組合法の制定を押し上げる力に

③ 法制化を力に気候危機、コロナ危機、大量失業問題に私たちはどう立ち向かうのか

(1) 労働者協同組合の法制化の意味

- ・ 全党・全会派一致して法案を衆議院の提出（6/12）できたことの重み
- ・ 全国の仲間の実践が本当にこの社会が法を必要とする状況をつくり出していることに、みんなで自信と誇りを持ちたい
- ・ そしてコロナ禍の中で激しい失業の痛みを伴いながら、本当の暮らしや働き方、新しい社会のあり方が問われ、模索される中での労働者協同組合法の誕生の意味。

法の目的～コロナ危機の情勢と、そのもとでの役割に重なるもの

基本原理～労働者の主権（共益権の行使）を認め、組合員の意見反映を通じて労働の現場における民主主義を保証するもの

- ・ 気候危機もコロナ危機もその背景、根本原因は共通
資本の増殖のためには、地球環境も人間の命も破壊してもかまわないという新自由主義的経済システムそのものにある。
- ・ 転換する新しい社会のあり方も共通
自然と人間、人間と人間の関係の豊かな社会

いのちに価値をおく F E C 自給圏

ケアを社会づくりの基盤にすえて、食とエネルギーを自給し、地域内で循環させ、地域間で連帯するコミュニティ経済の創造へ

*圧倒的多くの人々が、暮らしや仕事、地域をつくる主人公になれるのか
主権者としての自覚の高まりや連帯の力を生み出せるのか

(2) 協同労働運動の新しい時代の始まり

●私たちの運動・事業の2つの焦点

- 生活と地域の必要に応える運動・事業を創造すること
 - 組合員と現場・事業所が主導する協同労働運動に高めきること
- …その質的变化が生まれている

①経営改革～事業所の継続も閉鎖も自分たちで決すること

- ・自覚の高まり…コロナ禍の中でもやり抜いて継続させるぞ！
- ・今は身を切る改革だが利用者を増やす仕事を起こす迫力が生まれている

②コロナ禍での4カ月の現場・事業所の底深い変化

- ・命に関わる話し合いを深め、「最終判断は事業所の組合員が行うこと」を大原則として打ち出したことの重い意味
- “組合員の力を信じまかせること”
- “制約があっても尚、利用者や地域のために何ができるのか、自分たちで考え、行動すること”
- “コロナ禍を、利用者・家族・地域と仲間の信頼を深める契機にしていこう”



- ・利用者や家族から、自分たちのよい仕事の価値と存在目的を教えられる
- ・利用者や家族、地域の声を聞き取り、受けとめる取りくみ…「相談機能」を高めている
- ・利用者、家族の暮らしや願いまるごとを受けとめ、ケアに生かそうとするよい仕事の深まり
- ・この困難をみんなで底力を発揮し、乗り越えたことによる仲間の自信と結束の深まり

③私たちのよい仕事とは何かを改めて問い直し、深め合いたい

- ・そらまめが教えてくれたこと
- ・人間が自然の一部であり、自然も含めたいのちを守り育むよい仕事、よい暮らし、つながりの豊かさを感じられる地域とはどうあったらいいのか



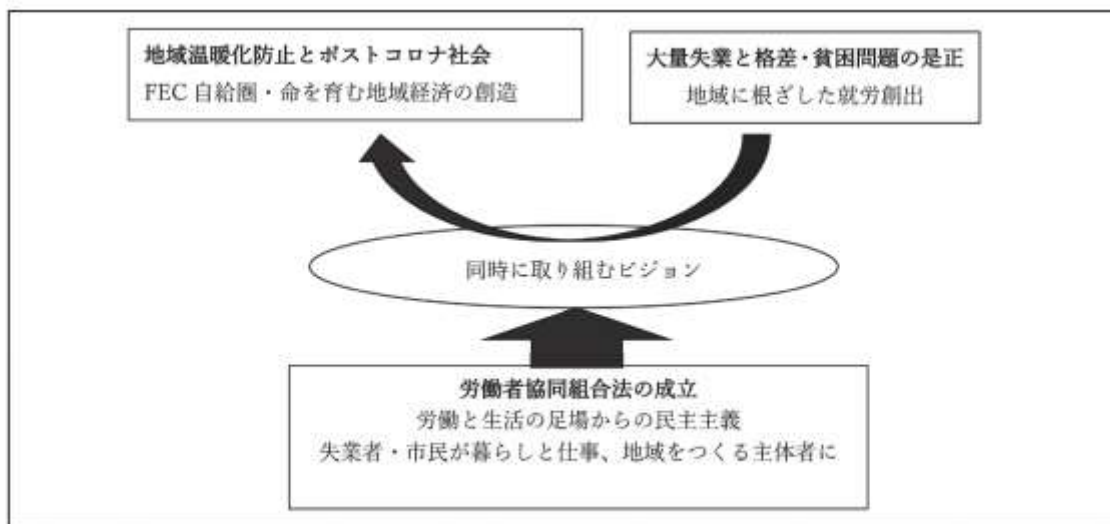
- ・自分たちの存在目的とは何か
 - ・コロナ禍の中で改めて問われ気づかされたよい仕事とは何か
 - ・コロナ禍が続く中でも安心して自分が出せ、支え合える職場とは、どうあったらいいのか
- ・もう一步ふみこんで、地域にみんなの居場所を。ここと失業・廃業、生活困窮の困難に直面する人たちを結んで、私たちに何ができるのか。共に新たな仕事おこしに向かえるのか。

(3) ポストコロナ社会の創造と失業者運動と法制化運動を1つに結んで

①戦後最大の経済危機と大量失業問題にどう立ち向かうのか

～市民主体のFEC自給圏を創造する運動からグリーン・リカバリー政策の実現へ

- ・世界の若者たちの「気候非常事態宣言」と「グリーン・ニューディール」政策を求める運動の高まり
- ・欧州、韓国、中国、米国ニューヨーク市、ロサンゼルス市でコロナ危機の復興に「グリーン・リカバリー」政策を位置づける流れ
その柱に食の自給・安全と有機農業を位置づける動きも
- ・日本においては300万人の失業者、60万件の倒産の危機…新たな産業創出をどこに求めるのか



②失業と生活困窮、命の危機にさらされる人々が膨大に広がる中で、私たちに何ができるのか、どう役割を果たすのか

- ・首都圏の生活困窮の相談窓口の現場から
- ・映画「ワーカーズ～被災地に起つ」の東北復興の格闘と、コロナ禍を超えるために何が求められているのか
- ・みんなで取りくみたいこと

①失業者の登録と地域の力で支え合うネットワークづくり

②秋の臨時国会での法の制定を確実なものにするために

フォーラム、学習会、ワーカーズコープ設立講座、映画上映会など

③当事者や新たな力と出会い、みんなのおうち・協同総合福祉拠点づくりの推進を

④労働者協同組合を公共政策に生かすための自治体との総対話行動を

生活給付付きの起業型職業訓練、みんなのおうち・協同総合福祉拠点づくりの支援、協同労働プラットフォームの提案など

③新たなワーカーズコープを地域からつくり出す運動へ

新しいエネルギーを吸収し、自らの再創造のエネルギーに

終わりに

ワーカーズコープを通じた挑戦が、組合員1人ひとりの人格の完成、人生の実現を豊かにするものへ。その集合体としてのセンター事業団であり続けたい。